

前田 耕作著

パラムナード

知の痕跡を求めて

「専門」の「縄張りの根性」(Grenzpolitzeitsche Befangenheit)から自由な知性がこぼれている。本書には、「閉域」を越える文化接触への美しい夢が集約され、その最良の軌跡を迎える証言が輝く。

人生を學術の豊饒として経験した著者の幸福な歩みが彷彿とする。

前田耕作の名に初めて接したのは、ガストン・バシユールの『火の精神分析』の翻訳。ほどなくミルチャー・エリアーデ著作集監訳者としての活躍が視野

る写像のようだ。この「主戦場」での切磋琢磨から、欧州碩学誰彼の名前が、綺羅星のように流通し始める。

そこには、浅薄な舶来流行賞賛とは次元を異にする、周到なる選球眼と、戦前期に遡るたたかな学問史的眺望の裏打ちがあった。現象学研究会は、伝統的な哲学研究の枠を打破し、文化兆候学や詩的言語学とも交文する。ジョルジ

ユ・デュメジールやジャン・ピエール・ヴェルナンなどの業績が、その波乱に富んだ人生の起伏もとも、浮かび上がる。雷撃された乗船と運命を共にしたジョセフ・アッカシ夫妻が齎したベグラム発掘資料と、密かにイギリスに移送されたワールブルク文庫の遺産との関係もそのひとつ。だがその周囲の錯綜した人間模様について本書はまだ、著者の滲透のほんの一部を綴ったにすぎない。

その學術中追遙の背景には、西洋古典学に対する著者の血肉化された学識が控えている。だがそれは、なんとこの知の宇宙だろうか。空海の『文鏡秘府論』はローマン・ヤコブソンの詩学を導きとして読まれ、ヘーゲルの『歴史哲学講義』の下敷きにはポリュビオスの『ヒストリアイ』が引き合いに出され、ベルリンの壁崩壊直前に訪れたフンボルト大学構内では、ヘーゲルとモムゼンとの会話が夢想され、モムゼン家の火災を報ずるニーチェの手紙が想起される。トロイアの遺跡を偲べば、脳裏には会津八一の和歌が浮かび、その記憶は宮川寅雄との西域巡礼へと横断する。セビ

ーリヤ西方のサンティポンをを訪れば、そこに生を受けたトラヤヌスやハドリアヌスの面影が立現れる。ローマ郊外、クラウディウス水道橋は、十九世紀末年に同地を訪れた竹内栖鳳の『羅馬馬之図』の舞台だが、現地に住む著者の耳には土井晩翠の「カンパニアの大野」が聞こえてくる。なかでもナポリの西、クルマエでシビュラの巫女を

訪ねる掌編、カイロからチイルの支流カノボスにそって地中海に下る旅程は、絶品だろう。歴史上の人物たちが陸續と亡霊のように出現するのだから。評者もまた、アレクサンドリア郊外はカイト・ベイの要塞で、クレタのマリヤの遺跡で、或いはウンベルト・エーコやジャック・ル・ゴフに同行したトゥルファン

山で、筆者に遭遇したような錯覚に襲われた。「記憶が歴史に奔転する瞬間」である。

無限の海、「夢見る林」からすべてを汲み尽くすとは人知を超ええる。だが引き潮が残した僅かな残骸からでも、本書の豊饒の一端は明らかだろう。著者は「われ万巻の書を読み、されど肉体は悲し」というマラルメとは反対の人生を生きてきた、という。詩的な教訓があちこちに散乱する魅惑ある散文の花綵 Florilegeは、「また走らねば」ならぬ生命の、変貌を遂げてやまぬ精華の姿である。

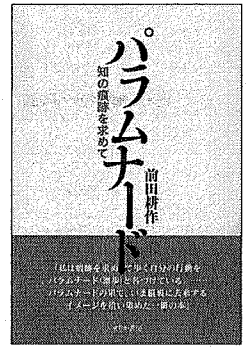
科学による開明には自己偏愛が付き物だ。それに逆らって原初へと魂を奪いかえすのが夢想の焔だとバシユールは説く。忘却とそれが人間の能力の大切な働きだと冒頭に述べた著者は、だが記憶は忘却を糧として文字のうちに蘇ると、巻末で変奏する。草の原から切られて、パンの堅笛となった楽師の奏でる哀歌には、燠火の痛みとともに、無限の安らぎがある。展開 de-veloppement、母胎的非限定 (ミッシェル・セール) を宿した、包含 envelopment としての「バイテイア」。その「パラムナード」(漂茶) の足取りを照らす

東西の文化交流を縦横に体現する驚異的な知の考古学

稲賀 繁美

★まさた・こうさく氏は和光大学名誉教授・アジア文化史専攻。名古屋大学卒。著書に『巨像の風景』『宗祖プロアスター』『ディアナの森』『アフガニスタンの仏教遺跡パルミヤン』『アフガニスタン史』など。一九三三年生。

【書評】「東西の文化交流を縦横に体現する驚異的な知の考古学」、前田耕作著「パラムナード：知の痕跡を求めて」(せりか書房 2014年)、『週刊読書人』2014年6月20日



A5判・439頁・5000円
せりか書房
978-4-7967-0329-1